

笑談貧福軍記

初編上

五格邊番

九冊

1897  
13

福壽草





御

目序

四海浪静なる。枝を写すまに。葉歳の涉代り  
 さくすくはると。思をる子解よ。恨ひなき。  
 暮年を祝ふと。実尔侍ふと。其恩  
 懐をあらぶるや。蟹の眼玉のよをえむ。  
 身は横着ふ事ある。おとろへ持込情態は  
 おとろへとて。不強者也。いつら家は内礼  
 起る。世は五節季の辛ひ絶を。書せしめ

コノハ

歌集  
 897  
 9



旗<sup>はたけ</sup>の<sup>の</sup>あし<sup>あし</sup>靡<sup>あひ</sup>ふ。晦<sup>くろ</sup>日の<sup>の</sup>賊<sup>さし</sup>者<sup>ぶ</sup>東西<sup>とうざい</sup>は走<sup>を</sup>る。  
 さま<sup>さま</sup>〜傾<sup>かたむ</sup>く城<sup>あき</sup>廓<sup>くわく</sup>もた。初<sup>はつ</sup>父<sup>ふ</sup>の太<sup>たい</sup>鞆<sup>ぼ</sup>の合<sup>あ</sup>圖<sup>ず</sup>  
 と具<sup>も</sup>より張<sup>は</sup>の敷<sup>しき</sup>を<sup>を</sup>りか<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ。矢<sup>や</sup>伐<sup>は</sup>謝<sup>しや</sup>ふ  
 とい<sup>い</sup>た<sup>た</sup>。後<sup>ご</sup>は<sup>は</sup>青<sup>せい</sup>身<sup>しん</sup>を<sup>を</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>き<sup>き</sup>は<sup>は</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ。後<sup>ご</sup>は<sup>は</sup>統<sup>とう</sup>の  
 城<sup>あき</sup>を<sup>を</sup>明<sup>あ</sup>け<sup>け</sup>に。彼<sup>かの</sup>是<sup>ぜい</sup>疾<sup>しやく</sup>の民<sup>たみ</sup>と<sup>と</sup>は<sup>は</sup>ま<sup>ま</sup>き。己<sup>おの</sup>と  
 録<sup>りく</sup>の<sup>の</sup>亡<sup>がう</sup>逆<sup>ぎやく</sup>も。進<sup>しん</sup>ま<sup>ま</sup>く家<sup>か</sup>業<sup>ぎやう</sup>と捨<sup>す</sup>るも<sup>も</sup>ど。  
 一<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>は<sup>は</sup>止<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>る。是<sup>こ</sup>を<sup>を</sup>終<sup>は</sup>る。笑<sup>せう</sup>法<sup>ぽう</sup>を<sup>を</sup>福<sup>ふく</sup>軍<sup>ぐん</sup>  
 記<sup>き</sup>と<sup>と</sup>是<sup>こ</sup>号<sup>ごう</sup>。拙<sup>せつ</sup>に<sup>に</sup>笑<sup>せう</sup>史<sup>し</sup>戲<sup>げ</sup>編<sup>へん</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ど。よく

の義<sup>ぎ</sup>命<sup>めい</sup>多<sup>た</sup>ん<sup>ん</sup>こ<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>。福<sup>ふく</sup>を<sup>を</sup>拓<sup>たく</sup>く<sup>く</sup>の<sup>の</sup>徳<sup>とく</sup>と<sup>と</sup>も  
 あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>。る<sup>る</sup>も<sup>も</sup>世<sup>よ</sup>乃<sup>な</sup>申<sup>まう</sup>の<sup>の</sup>頑<sup>こん</sup>思<sup>し</sup>を<sup>を</sup>も<sup>も</sup>ら。  
 の<sup>の</sup>好<sup>こう</sup>く<sup>く</sup>は<sup>は</sup>具<sup>も</sup>より<sup>より</sup>貧<sup>ひん</sup>を<sup>を</sup>持<sup>も</sup>つ。我<sup>われ</sup>ん<sup>ん</sup>ら<sup>ら</sup>ち<sup>ち</sup>ん  
 費<sup>おこ</sup>る<sup>る</sup>と<sup>と</sup>お<sup>お</sup>ふ<sup>ふ</sup>〜<sup>〜</sup>終<sup>しゆう</sup>へ<sup>へ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ

未の孟春吉且於輿池富括筆執

浪華



一荷堂半水戯誌







目録

發端

富家小継りて貧者頻りも助成を請ふ

第二回

二神の術を得て貧福の両氏空中を走る

第三回

觀樂城は福富勢軍議を定む

條目終

笑談貧福軍記初編卷之上

浪華

一荷堂半水戯編

漢端富家に經りて貧者困窮を誌す

夫貧富ハ天の配劑ニありて富といふも尚貧らむ

貧といふも必り貧とらむといふも止豆の二字をさる者

ハ煩惱をくつて富るに憐る是を仁者ハ不富と云

仁をらむと老實を言ふ出うけてもそれも理屈ハ當

世のさつむを問尺も合さむべし。このく富る小四苦ハ



誰衆も貧乏へ好まらざる情欲と煩惱に  
 心のうちを蒸すこの羊あり羊羹喰ふこと傳はる  
 して遊んで綺羅を飾りて美食を好む婦妻も倦  
 て娼妓を選り朝寐夜遊色里ぶよひ將氏放蕩を  
 粹と心得吉と手廻と許さす意の馳けり舞  
 心の猿と身代の狂ひのけて止むる一端底まで落  
 つるべし又浮浪へなるぞと昔のら腹をうら敷さひ  
 つらしてのみぶらうりと舞家の内は食客も己前より

る安あいらの只金銀は追つたらせ身まつく藝へ借  
 金の漸りその食言つくと外は取得へみた袖子  
 ぬらまでもまご改めぬ人の世間よあまべし。さ  
 遠首の富貴は腰を切して居や浪速の街小福富屋  
 長者清門とて金銀財宝庫は備親屬家僕多し  
 のひ家内和順は暮せし主人長者清門の跡を  
 小唯正直と道として後にも貧乏の心も積善の  
 して余慶とある世の議もむかへらばと賤息長

一富貴己の福

二ノ壺

毒島子軒婦を逢へ嬌長よりかけて喜悅の共振舞  
 せあることとて出入の庖亭よむ寄て献立書を分り長  
 伴夫婦よあきまのせと庭口近く膝をさめ相談をし  
 て居るありしの中戸の外の中庭ありあがる一下流  
 ぬめんあそびせとむそく色まで音のふまで庭は居る  
 者屋の中戸を細目は明うけて共人品をのり  
 見きげ年餘三十五六ふてたのこ醜さ夫からいど發  
 苦くと齟のびり。秋風をむくふく時節むも入の

着物も去らぬして心のうち又締まらぬと帯まで  
 賜見さとりさき。彼者家の色をうけ其うを穢ひさ  
 おとて虚に這家へ入ると無方圖をん食め不  
 往と。志りも付さどは者へ家内とのそたて腰を  
 免。イヤとてこーハは主人よ。おさういねがぬさう  
 面目もくも此形でいざくさんどあしる。身の上  
 身の上屋賃助でござりおると。あつ中戸の内は入を  
 長者法門へ看るありも眉根も疲さうち寄て入り



と思へど和らうに彼金助は内びつ。金助どのうよ  
 こん〜のりも達者であめでお定く用事もあふ  
 るまじし今日いぬさう取はめて奥ふいひ人もあるなれ  
 べ氣のどくもがらふりやのし出るや〜とらいで  
 下さき又くをみしも聞ませふとまきて金助あ  
 まよられた其徒庭は蹲踞て。のよふ再度まのり希る。  
 誤でく一切じごうまはひどい覺の通り困窮まで。マ  
 今日か〜しははぬ。そま由入恥おもことひやくどあな

こまたありは參上す〜とどめぞ今一度石子馳してこの  
 難渋をあしきとけは禰りとふ存非る。こま返さむ〜  
 以恩のあるは取りへのその内を。〜のよも持来は  
 せべよりふふも〜いりませむ。〜其上の心並に  
 せへ山より高き這首家の後居一と越るはみるま。  
 脊みる腹みるのへらまぬ。難面小余りて糸りおとす。  
 以用繫も〜い〜ま〜が。何卒お〜下〜し〜  
 以恩よあづらりませむ。そまよえ手は何るも。

金貨福軍記新編

上三



眞福軍記

福考又  
 ことぶつ  
 はんたは  
 かん  
 助  
 助  
 助

上

生活して糸りけるたとき生涯の恩を  
 のせしめぬ日何分は勘弁下さきて宜し  
 り上井おし出るにきて糸りあるも  
 り幸棒がけ  
 ろひ非たな幾重もむこのみと  
 後居不須さうち付て  
 五上又暗るよまき者門へ聞て  
 足膝立るを金助  
 どの如何又金助とらや他さる  
 とも又してもく五心の  
 おこの元来私とおとさん  
 親類あてしやび  
 万の隣家の附合よ心易  
 ぶらう中そのうへ

爺の金兵衛どのが存命  
 中うら三四度の取り金も  
 あるもどし死ぬるとい  
 ても其あふ唯の一の  
 但しうらうらむもど  
 たらぬがそらから此  
 人の代りありて  
 問屋の仕切が不豆の  
 と聞たむと小痛へや  
 んめて  
 心配せらさよふと思  
 や三両や五両と第  
 李この  
 どりうへが重りて都  
 合三目跡であくく  
 聞正せむ  
 く這人の行作がら  
 悪い遊ひ小遣ひと  
 て終ふ家主小  
 退出さき何處まぶ  
 ざるうまらむども  
 或ハ三歩ま

一両ありくみ入る。田毎ふじりまのりかき答る事ごと。知女  
 ように。剛絲とあひむ。いさうりよとも用立てお貸りよせと  
 其後に見るむむくみ風体あり。商賣と下もる様  
 子。實のりも。此程より。三錢二錢でも。貧助どの  
 へ。のりくみ。こ来さつを。止おさふと。心で。是を。あげて。あり  
 外。最早。こき。まど。りく。分。厘。拂。と。ろ。ふ。と。思。ひ。お。せ。さ。ば。  
 ころ。が。内。も。是。の。だ。り。ひ。出。い。金。用。よ。ま。さ。て。下。を。さ。し。し。こ。き  
 て。貧。助。の。け。う。ぶ。り。ぎ。豕。一。ひ。り。と。も。の。お。言。ひ。よ。て。面。目。次

第も二ごりませよと。何方たのまん先もあ。是迄おねのひ  
 であし。真。實。不。必。死。の。身。の。上。る。ま。は。定。め。て。お。腹。も。互  
 おせふ。と。何。卒。の。蒸。悲。の。お。こ。ろ。よ。て。今。一。回。の。お。助。情  
 又。預。り。外。き。ば。け。の。ち。ら。い。あ。つ。く。里。心。を。改。免。ま。して。商。ひ。の。し  
 て。さん。と。お。ね。と。言。ひ。の。終。を。待。て。て。コ。レ。く。貧。助。の。其  
 言。訳。の。こ。き。迄。よ。何。回。さ。お。し。う。ま。き。お。ね。ソ。リ。や。い。さ。う。の。お  
 金子。の。お。の。り。の。お。ま。さ。ら。い。と。い。ひ。の。お。金。心。お。来。ら。さ。る。度  
 田。は。應。こ。り。よ。て。貸。り。は。して。却。て。お。ま。の。為。に。あ。ら。さ。る。と。

先づこの  
 おつて経紀でもさういふやうな事。其時よせぬとりのかゝりませぬ。  
 さとるしは方小用談もあそばさる茶と呑で早ふ歸志をま。  
 奥八やのあかさ小待遠どや。アいろくくるか人が来ていざさる  
 間をとりまゝ。ア何甲らの吸物とや。ア二献目の井鉢を。  
 二盃酢がよろろふと長者侍門へおま向て彼庵亭に語り  
 つ。再度言はせかこつていざ貧助尚も手をとつて。おはらの  
 左へいりるともあがら何分あひがいのりか。井。只今ふてい

後悔し。井。おぞい助け下さりませ。ハイ且耶さん。おらん  
 座ん下さりませ。ハイおひがいのりか。井。宜しふあなたのことゆ井。  
 何分お慈悲なたとけと登り夜舟は川堀の賃錢せがみさ  
 寐と客をゆとがま起とぶとくよて強ふいよと者屋の先  
 よる傍に聞居し小主人の言はのさき。一を見て堪へるして  
 り貧助を横目よにらんで立上り。コウは人のあへ年。一。こ  
 聞分のあひ恥さらむ。這の且耶の心生得は斯まで愛  
 想つらさき。い。おまの身持が悪くから。あんながあつてのこ

りあつて。今日けふの大事だいじの祀儀まつりぎ日ひアタむころころのいぎぬ  
 ぞして朝あさツをらうらう義縁ぎえんのころころのいアア出でてうせと引出ひきだを  
 貧助ひんすけ庭にらは意路張いろうぢてあききけ。あひひがいあいのこと尚なほあ  
 つよつよくせがむむままぞ庖亭ぼうてい大おほささふ腹はらをこて波太なたい餓鬼がきといひ  
 さぬさぬ腕うでをもちて中庭ちゅうていあり。ちちららはは任まりま引ひづりだだ。  
 其その後あ大道だうだうへつききのたらら。表おもてのくりり戸どむつ志しかりと。志し免だ出だ  
 ささせせるる貧助ひんすけへ何なにとせんんくく泣面なみをも復たへまどもははああら  
 めめく。當あてはあてて来きてき金かねささももあありりととくく遠ちがふふ斤しんちちんんむむ夫そささへ

尻しりのさきき草履ぞうりたた亡想ぶせうととるるああげげ首くびはは戻もつつく  
 みみららるる吾わ寓うへへ不ふんんの家や根ねああるるむむりりみみて。寵へつああららむ  
 鍋釜なべくまああく。家内やうち志しここてもも皆みなくくろろたた四よ枚まいたたららぬぬ異たぐ宜い  
 さへ縁へり加かひひててるる一いち畳畳へへ主ぬいのい先途せんどう見みととけけんととああとと小  
 のこりりてて止とどまませせどどけけへへたたさいさい但そままるるいいひひはは表おもてはは数かず々々所ところ吸ひ  
 ぐらぐらのの燒跡やけどはは紙屑しせん實みももああぐぐとと果は直ち女むすめのの外ほかははももら  
 ささききここりり其その余のちはは柱はしらとと古壁ふるかべのの煤すすとと同おなじじととななりりて。  
 喰くののここりりるる土つちををへへのの窟くつもも鼠ねずみはは引ひききてて食く物ぶつささへへるる

りし只貧乏の手をぬめ三十方ふきて茫然と  
 思案へての二面へるむと愁面さけて今ハも空く  
 るし腹のるう四方八方塞りの友達ままで見放さ  
 誰も金神うら鬼門當歳へぬひ計都星つれと  
 吾身も倦果てつくぐ愚ひめぐらせれば界へあら  
 黄泉の地獄の沙汰も金次第唯このの又憎まれ  
 てハ浮世も生るゝひもあく是までみせし故傷の  
 むくおて斯い窮さるうとさうつぬりる急難も身の

悪行と後悔あり。彼長者湯門の身上も亦見くらべ  
 みる時ハある。浮世も産きても宮殿の柱と雪隠の  
 踏板いふは福福へ天まうせといと聞へぬ福の神うち  
 出の櫃の七寶と時ちららとあう依古多くハ吾も  
 さづちもへらで高ひ處へ櫃もちハ在て益るは福神  
 あり貧乏神の物好の拓さよあめて今さら又かそく  
 心とあらうと絶ての今日の助いよもあるおじ王上ハ  
 是非があら死てハ命が減るは壁言古薦よとふも

貧乏神記

上ノナ

いんげん  
 まつり  
 せいじん  
 いんげん  
 まつり  
 せいじん  
 いんげん  
 まつり  
 せいじん



貨物  
 言初結

此  
 下



七度轉で八回發るも世よあるあらはと聞のらへ佛も  
 祖帥も一回の難行苦行もてまひて末世の衆生をたど  
 け給ふ。そき世のつめ人の爲。そきハ食爲をらのこめ。  
 格別退き一譯でハひし食をるも因縁をり。勝  
 手理屈は引寄る。破き手杖と土鍋をさけてまかりく  
 たち上り。はくぐ。吾身を見おのせハ又今さらは開性  
 るく。あら淺間ハ愧一の我とごごやとあり。寧安達  
 が原の後ジテ見るあり。今と吾家の見納まで今夜

の閨ハ橋がやど口で洒落下も心中ハ流石ある。秋の  
 雨あつらり暗るこ中らと氣もまよんがりと儒草鞋  
 がそくゝるがら庭はあり立表口をさしていでんとするふ  
 慮がけるたじろあり。さも身盛りハたは色くく。夜  
 のあくハヤレ待て貧助。ときは女は訛して聞とる言あり。  
 尤のこ貧乏と苦なせむと非人の存念志をらく止り。  
 とくく。是迄来るべと。二枚目敵役とまふ色色ハ  
 呼とめらきて貧助ハ陣家の弥陀六看るごとく。立ち

ありて不慮ふあん面めん鼠ねずみありなり生いる者ものあじと思おもふと肉にくは  
何なに奴やつあきば吾われととめ斯かくさしつる身みの上うへののみんご  
と見みりけてあやうさば。ん扱こへ明あ家やもむと一ひとたさる居い  
るあきば。狐こ狸りの脚あし戸どをるあきまよ又また吾われ遍びん博ぱくの場ば所しよへつけ  
込こめろを迷まよと者ものあらん。たとひ肩かた中ちゆうみごるとも狐こ  
たぬさよ夫むこきまあや。いらるること又また問ひどりては上うへ腹はらの  
滅めどうま。ドリヤ性しやうふりと踏ふむとと冊ふ度どりしろは色いろ在あて  
そのうごひりまこととるむぐら吾われ正ただしく大おほ精せいあらしと。

女めがこめ小こ身みを護まもる貧びん乏ぼう神しんの出現あり心こころを慎しんてどが  
姿ま形がたとく眼めと止とめて見みるべしと聞きより貧ひん助すけ保た天てんは  
あつむく俵あ又また此この神の相あ形と着きをバコハいら小こ色いろぢぢ  
黒くろき瘦や面めんまで。頸う又また茶ちいろの髪かみを亂ごし。髭ひげむやくや  
と肩かた小こほせ想そう身みへ荒あ布ふと後あととひしととく。何なに處どこが袖そで  
甲かた社しゃやら。つらぬ衣きぬ又また身みをつつと右みぎ手て小こ破やぶき團だん扇せんを  
のちた手て又また古ふるむし。帚ほう木こと携たづへ斤しん脚あしへ草くさ履履。斤しん豆まめハ  
鼻はな緒おの切ききし下した駄だと引ひきどり。四よ方かた又また鼻はなと異あ香かとち



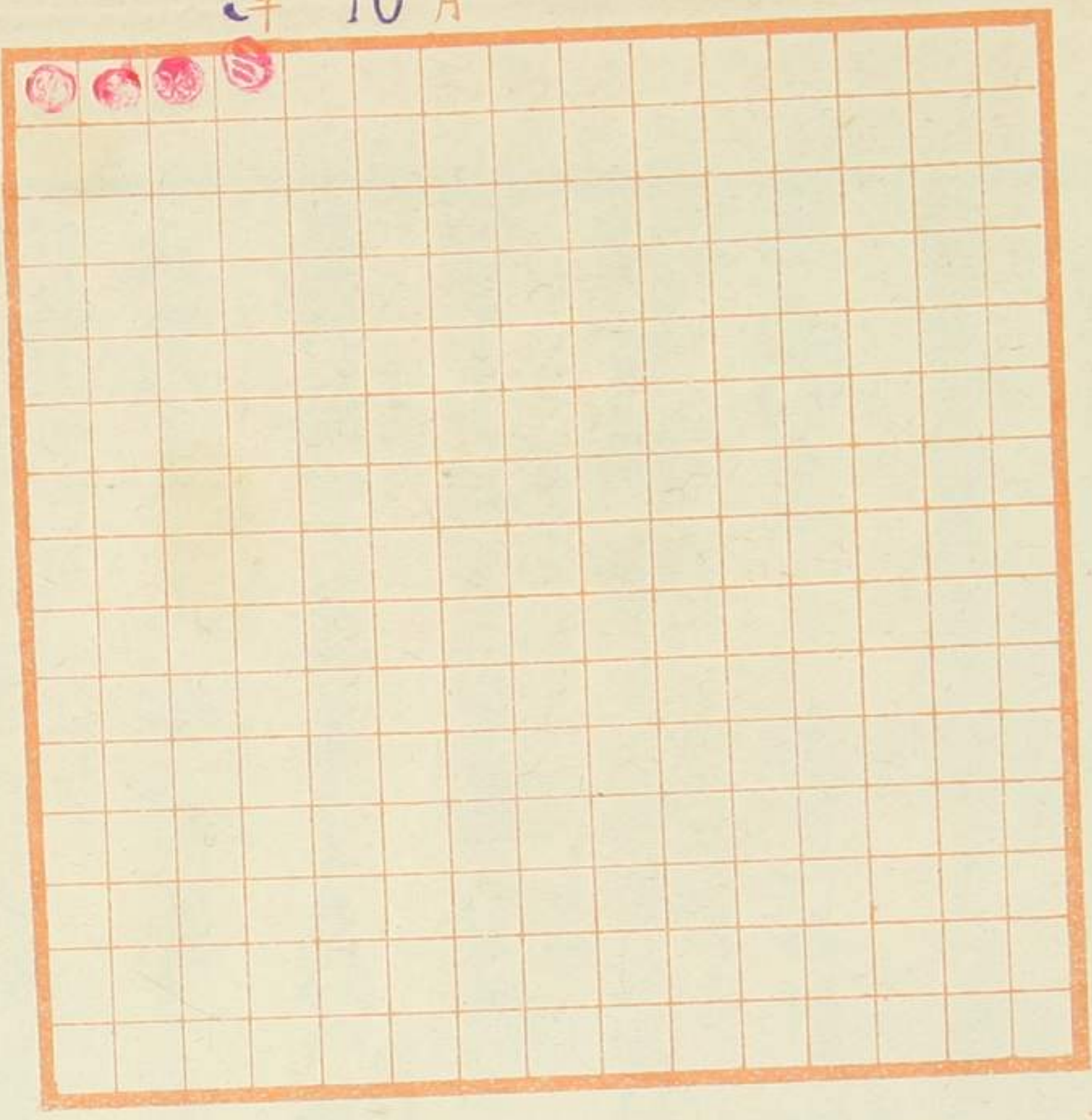
心もとどえ不慮この家も影も志の孤明暮所為を  
 みるどころは又物を扉戸の肩も直志居そいらふ  
 疵とつけ破き障子のそり久ざ行燈の皿は吸ぢらの山  
 ざるして又らる。煤掃とあつることもある。煤はてん  
 井も雲をかくし。月も二度のさうや刺風呂の十日も  
 俗ごまば惣身も苦むと垢と絶ごど。阿嫁の身習  
 普通あふげ。齒鉄はこの家へ嫁の節は結するその  
 ちりて。田幸螺のごとた齒をあらへ。常透髪は

身と暗を春の夜遊び冬の朝寐夫婦のいさゝの目と  
 たへご。すること成こと看るたむよ。こを食負動とそむら  
 びして深く心はゆるひく。ぶ世よの食負も多りごど。近  
 近そらひく道落おしと喜比のあゆり食負兵傷が  
 みよそめて己きやき天暗食負よせんめと歳久くも  
 此家とそらご。遣ひ減らせ。甲斐ありて父おとらぬ  
 せがきの食負助。いぬん食とるもあでも。よく食負を  
 仕とげ。ぞ。アラうき。や。身容ら。や。ナア。と聞より

貧助あゑとをげまじ。其<sup>ま</sup>がうの底<sup>そこ</sup>まつぬり。今<sup>いま</sup>あを  
 人の門<sup>かど</sup>は立<sup>たち</sup>。食<sup>め</sup>のふ<sup>め</sup>でもるまをた<sup>た</sup>と心<sup>こころ</sup>変<sup>か</sup>りて出<sup>い</sup>せ  
 者<sup>もの</sup>を呼<sup>よ</sup>止<sup>と</sup>まふ意<sup>い</sup>へい<sup>い</sup>ふ。ラ、其<sup>その</sup>不<sup>ふ</sup>審<sup>しん</sup>め<sup>め</sup>り<sup>り</sup>とも至<sup>し</sup>極<sup>ごく</sup>  
 かよそ生<sup>い</sup>と<sup>ま</sup>一<sup>い</sup>活<sup>け</sup>る者<sup>もの</sup>。慾<sup>よく</sup>と志<sup>し</sup>ら<sup>ら</sup>ぶる<sup>る</sup>の<sup>の</sup>も<sup>も</sup>ある<sup>る</sup>。然<sup>しか</sup>れ  
 ども。都<sup>と</sup>鄙<sup>び</sup>遠<sup>えん</sup>近<sup>きん</sup>に建<sup>た</sup>て<sup>て</sup>あ<sup>あ</sup>ぶ<sup>ぶ</sup>千<sup>せん</sup>萬<sup>まん</sup>無<sup>む</sup>量<sup>りやう</sup>の斬<sup>や</sup>切<sup>け</sup>の<sup>の</sup>り<sup>り</sup>ち。  
 よく内<sup>ない</sup>實<sup>じつ</sup>とさ<sup>さ</sup>が<sup>が</sup>見<sup>み</sup>る<sup>る</sup>ふ真<sup>まこと</sup>留<sup>とめ</sup>る<sup>る</sup>ハ少<sup>すく</sup>くして<sup>て</sup>こ<sup>こ</sup>も<sup>も</sup>こ<sup>こ</sup>の  
 道<sup>ち</sup>又<sup>また</sup>意<sup>い</sup>と寄<sup>よ</sup>。不<sup>ふ</sup>如<sup>こ</sup>意<sup>い</sup>の身<sup>み</sup>代<sup>しろ</sup>多<sup>おほ</sup>う<sup>う</sup>る<sup>る</sup>内<sup>うち</sup>其<sup>その</sup>貧<sup>ひん</sup>道<sup>どう</sup>  
 よ<sup>よ</sup>め<sup>め</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>あり<sup>り</sup>。○持<sup>も</sup>貧<sup>ひん</sup>乏<sup>ぼう</sup>の慾<sup>よく</sup>貧<sup>ひん</sup>乏<sup>ぼう</sup>の時<sup>とき</sup>世<sup>よ</sup>貧<sup>ひん</sup>乏<sup>ぼう</sup>

○游<sup>の</sup>民<sup>らびん</sup>貧<sup>ひん</sup>乏<sup>ぼう</sup>の葛<sup>ま</sup>用<sup>りやう</sup>貧<sup>ひん</sup>乏<sup>ぼう</sup>の藝<sup>げ</sup>貧<sup>ひん</sup>乏<sup>ぼう</sup>の上<sup>うへ</sup>貧<sup>ひん</sup>中<sup>ちゆう</sup>貧<sup>ひん</sup>  
 下<sup>げ</sup>貧<sup>ひん</sup>と分<sup>わか</sup>ち<sup>ち</sup>今<sup>いま</sup>日<sup>にち</sup>茶<sup>ちや</sup>粥<sup>じやく</sup>もさ<sup>さ</sup>さ<sup>さ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>を<sup>を</sup>極<sup>ごく</sup>貧<sup>ひん</sup>窮<sup>きゆう</sup>と号<sup>ごう</sup>  
 つ<sup>つ</sup>其<sup>その</sup>余<sup>よ</sup>語<sup>ご</sup>る<sup>る</sup>ふ<sup>ふ</sup>い<sup>い</sup>と<sup>と</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>あ<sup>あ</sup>と<sup>と</sup>右<sup>みぎ</sup>に<sup>に</sup>著<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>を<sup>を</sup>貧<sup>ひん</sup>乏<sup>ぼう</sup>の仕<sup>し</sup>様<sup>やう</sup>  
 又<sup>また</sup>速<sup>い</sup>く<sup>く</sup>傳<sup>でん</sup>書<sup>しよ</sup>もあ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>尚<sup>なほ</sup>古<sup>こ</sup>の編<sup>へん</sup>の奥<sup>おく</sup>に<sup>に</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>。再<sup>さい</sup>會<sup>かい</sup>あ  
 へ<sup>へ</sup>る<sup>る</sup>時<sup>とき</sup>も<sup>も</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>ば<sup>ば</sup>又<sup>また</sup>その條<sup>じょう</sup>下<sup>か</sup>に<sup>に</sup>い<sup>い</sup>て<sup>て</sup>説<sup>とく</sup>く<sup>く</sup>保<sup>く</sup>せ<sup>せ</sup>ば  
 貧<sup>ひん</sup>乏<sup>ぼう</sup>の世<sup>よ</sup>の中<sup>ちゆう</sup>の<sup>の</sup>人<sup>ひと</sup>も<sup>も</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>る<sup>る</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>と<sup>と</sup>業<sup>ごう</sup>も<sup>も</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>く<sup>く</sup>愁<sup>しゆ</sup>る<sup>る</sup>  
 こと<sup>こと</sup>は<sup>は</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>む<sup>む</sup>ど<sup>ど</sup>り<sup>り</sup>分<sup>わか</sup>る<sup>る</sup>ふ<sup>ふ</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>身<sup>み</sup>へ<sup>へ</sup>た<sup>た</sup>び<sup>び</sup>ま<sup>ま</sup>さ<sup>さ</sup>  
 ある<sup>ある</sup>貧<sup>ひん</sup>乏<sup>ぼう</sup>も<sup>も</sup>て<sup>て</sup>昔<sup>むかし</sup>神<sup>かみ</sup>慮<sup>りよ</sup>は<sup>は</sup>の<sup>の</sup>い<sup>い</sup>一<sup>い</sup>者<sup>もの</sup>に<sup>に</sup>袖<sup>そで</sup>を<sup>を</sup>た<sup>た</sup>べ

年 10 月



あつたや非人と性とのあつた  
まの空しく言またんとい  
はと止めて食ふとん食の差  
義の術を傳へ吾大望と語を  
食樂世界は遊覧させごと  
と慎て聞べと身をせりぐと  
めりる。

之終

食部

心けつしんのそきそきを見みててわくべたや非人ひにんと性せいをのめ  
 るら。あまあま道窮みちきゆうくく貪いん之の空くうくく言いまたへんことい  
 とをげりあく思おもふふ付つ汝に止とめて貪いん之の食じきの差さ  
 別べつを説と諭ご。尚なほ亦また不ふ思し義ぎの術じゆつを傳つへ吾わが大望たいぼうを語ご  
 何なにうう。汝にが身み體たい安あん然ぜんと貪いん樂らく世せ界かいは遊ゆう覧らんさせせど  
 るた腹はらををせせままどどりりれれ心こころを慎しんて聞きべべと身みををびびりりくと  
 ありありて又また團扇うすあふををそのそのままりりるる。

笑談貧福軍記初編卷之一終

